



～文化遺産を訪ねて歩こう!!～

4月号から来年3月号までの上尾歴史散歩は、『あげお歴史探検マップ』をもとに、市内の文化遺産を訪ね歩く市内の散策コースを紹介します。10～12月は、原市地区周辺のコースを巡ります。

4月 今に伝わる祈りの文化
5月
6月
7月 荒川周辺に花開いた文化
8月
9月
10月
11月 人と文化が繋いだ町
12月
1月 街道に刻まれた歴史
2月
3月

人と文化が繋いだ町
～原市の町場と史跡をめぐるコース～

距離	時間
③ 妙 蔵 寺	0.19km ↓ 2分
④ 原市の町並み	1.10km ↓ 11分
⑤ 宝 蔵 寺	

★時間は、歩いたときの目安の所要時間です

原市の町並みの賑わいを抜けて

「妙蔵寺」③を出て、第二産業道路を越えてさらに東に進むと、県道さいたま菖蒲線の旧道に出る。この道は「菖蒲往還」として知られた脇街道で、「原市の町並み」④はこの街道沿いに形成された。原市は、その名前が、吉野原村(現・さいたま市北区吉野町)の市が立った場所であることに由来しているように、市場集落としての歴史を持つ。『新編武蔵風土記稿』によれば、江戸時代の初期頃から「原市」という呼称が用いられるようになり、3と8のつく日に市が立った。特産の白木綿をはじめとして、米・麦・甘藷の取引が行われ、明治から大正時代に最盛期を迎えた。原市の「市」は、家と道路の間に設けられた「二ワ」(庭)と呼ばれる約3間(約5.4m)の空間を利用して開かれた。現在でも、道路から少し離れて建てられた建物や、間口が狭く奥行が長い短冊状の町割りに、かつての名残を見ることが出来る。

原市の町並みを歩いていると、神社や地区の公民館に倉庫があることに気が付く。この倉庫の中には、市場集落としての賑わいを今に伝えるものとして、「原市山車彫刻」(市指

定文化財)がある。原市の第1区から第5区(上新町、上町、中町、下町、下新町)に1基ずつ伝わる山車を彩る彫刻群には、鳳凰、龍、孔雀、獅子、牡丹など多様な図柄が彫り出されている。山車は江戸時代末から明治時代に造られたと推定されており、彫刻の作者は、6月号でも紹介した「向山不動堂彫刻」と同じく、旧大谷本郷村在住の宮大工・山田弥吉と考えられている。

原市の町並みと新幹線の高架に挟まれるように、「宝蔵寺」⑤がある。寺の本堂南側には、樹齢500年から600年と推定される古木の市指定天然記念物「らかんまき」がそびえている。

ラカンマキという木の名は、その果実が羅漢の坊主頭と袈裟に似ていることに由来する。新幹線の用地買収にかかったため現在地に移植されたが、無事活着し、現在に至るまでその佇まいを見せている。原市地区には、「らかんまき」同様に新幹線開通に伴って移転したものに、「佐四郎稲荷」の伝承が残る稲荷神社もある。

次号では、原市支所前の通りを東へ進み、綾瀬川沿いに形成された文化を巡ろう。(上尾市生涯学習課)

「妙蔵寺」③を出て、第二産業道路を越えてさらに東に進むと、県道さいたま菖蒲線の旧道に出る。この道は「菖蒲往還」として知られた脇街道で、「原市の町並み」④はこの街道沿いに形成された。原市は、その名前が、吉野原村(現・さいたま市北区吉野町)の市が立った場所であることに由来しているように、市場集落としての歴史を持つ。『新編武蔵風土記稿』によれば、江戸時代の初期頃から「原市」という呼称が用いられるようになり、3と8のつく日に市が立った。特産の白木綿をはじめとして、米・麦・甘藷の取引が行われ、明治から大正時代に最盛期を迎えた。原市の「市」は、家と道路の間に設けられた「二ワ」(庭)と呼ばれる約3間(約5.4m)の空間を利用して開かれた。現在でも、道路から少し離れて建てられた建物や、間口が狭く奥行が長い短冊状の町割りに、かつての名残を見ることが出来る。

原市の町並みを歩いていると、神社や地区の公民館に倉庫があることに気が付く。この倉庫の中には、市場集落としての賑わいを今に伝えるものとして、「原市山車彫刻」(市指

宝蔵寺の「らかんまき」

